

■ 研究発表論文

イサム・ノグチの萬来舎庭園とリーダーズ・ダイジェスト東京支社庭園について

Title Isamu Noguchi's Garden Projects, Banrai-sha and Reader's Digest Tokyo Branch

田井 洋子* 佐々木邦博**
Yoko TAI Kunihiro SASAKI

Abstract : Isamu NOGUCHI (1904-1988) is a Japanese-American sculptor who worked not only on an individual sculpture but on a space as a sculpture calling it a 'garden'. He developed the idea of a spatial sculpture by observing traditional Japanese gardens and adapted the thoughts and elements of Japanese gardens into his spatial design. Noguchi also sought the way to unite the spiritual side of Japanese gardens and the function of Western plazas. The purpose of this study is to clarify Noguchi's attempts mentioned above through examining the process and design of gardens of Banrai-sha and Reader's Digest Tokyo Branch by researching 360 related articles and documents since 1950, mainly written in Japanese. Those two gardens were Noguchi's earliest garden works, carried out in 1950-51 in Japan. In Banrai-sha garden, Noguchi drew an abstract form on the ground using a method of Japanese garden called 'jimoyo'. In Reader's Digest Tokyo Branch garden, Noguchi experienced to work with Japanese gardeners and learnt the skill of Japanese gardens such as the way of arranging natural stones.

Keywords: Isamu NOGUCHI, Banrai-sha, Yoshiro TANIGUCHI, Reader's Digest Tokyo Branch, Antonin RAYMOND, Japanese garden

キーワード：イサム・ノグチ、萬来舎、谷口吉郎、リーダーズ・ダイジェスト東京支社、アントニン・レーモンド、日本庭園

1. はじめに—イサム・ノグチ（1904-1988）と初期庭園作品

その生涯を東洋と西洋を往来して生きたイサム・ノグチは、単体彫刻を扱うのみでなく、彫刻としての空間のあり方を追求し、空間彫刻としての庭園やランドスケープを世界各地に30作品以上残した。彼は幼少を日本で過ごした後アメリカへ渡り、1931年に1度目、1950年に2度目の来日を果たす。この2度の日本滞在時に桂離宮、龍安寺、銀閣寺、詩仙堂などの日本庭園を「カメラを持った猟犬のように駆け廻り」¹⁾と記されているほど熱心に見学した。彫刻で空間をつくること、そして彫刻を日常生活や社会に結びつけることを模索していた彼にとって、自然石の配し方によって空間が形成されていた日本庭園は彼の求める「空間の彫刻」のあり方に大きなヒントを与え、伝統的日本庭園を発想のベースとした空間作品である庭園制作の契機となった。

彼が日本で庭づくりを始めた1950年代、庭園をとりまく環境は併設する建築物のモダニズム化、鉄筋コンクリート化、高層化で大きく変容しようとしていた。イサム・ノグチは伝統的日本庭園からアイディアを得ながら、様々な建築家との協同作業を行い、近代建築のスケールに適応した新たな庭園空間の模索を行なった。また、都市において日本庭園の精神性と西欧広場の機能性とを結合させ「レジャーのためのスペース」²⁾を出現させるため、ジャンルや文化を越境した目で日本庭園を研究し、自らの作品で実践した。

イサム・ノグチの実施された庭園で初期作品と定義できるのは次の4作品である。①慶應義塾大学第二研究室萬来舎庭園（以後、萬来舎庭園と記載）（1950-1951）、②リーダーズ・ダイジェスト東京支社庭園（以後 RD 東京支社庭園と記載）（1951）、③コネティカット・ゼネラル生命保険会社庭園（1956-1957）、④ユネスコ本部の庭園（1956-1958）。この定義づけには「ユネスコ本部の庭園」でイサム・ノグチの造園が世界的に知られるようになったという客観的な理由と、ノグチ自身が「1956年に私はパリのユネスコに日本庭園を制作することになるのである。その後、私

の庭園は、日本について私が知っていることから、より一層しばらくしないようになつた。」³⁾と述べているようにこれらの作品以降、彼の庭園制作に内面的な変化が認められるためである。

中でも初期の萬来舎庭園と RD 東京支社庭園での彼の制作過程と作品はノグチが日本庭園の伝統技術を学習した過程として現代の庭園デザインとその方法にも示唆を与えるものと考える。

イサム・ノグチの庭園、ランドスケープを対象とした既存研究ではアナ・マリア・トーレスが庭園とランドスケープ作品を時系列で概観・整理している⁴⁾。Marc Treib はユネスコ本部の庭園を詳細に考察⁵⁾、Bert Winther はノグチの伝統的日本庭園の近代化について考察している⁶⁾。しかし庭園に関して日本語文献を詳細に検討したものは見当たらないため、萬来舎庭園と RD 東京支社庭園について基礎的資料を整理し、考察を行う。

2. 目的と研究方法

萬来舎庭園（1950-51）と RD 東京支社庭園（1951）におけるイサム・ノグチの制作過程と彼が表現しようとしたもの、そして伝統的日本庭園のどのような要素を自らのデザインとして抽出し、形体化したのかを明らかにすることを目的とする。

研究方法は1950年以降のイサム・ノグチに関する文献（主に日本語）を調査し、該当する360件の雑誌記事・単行図書・映像・インターネット資料を抽出した（その内訳は表-1）。その内、萬来舎庭園についてはノグチによる記述が12件、それ以外が71

表-1 イサム・ノグチに関する文献の件数と分類

	イサム・ノグチの記述・発言	イサム・ノグチに関する研究資料
単行図書・単行図書収録の著述/インタビュー/対談・鼎談	6件	56件
逐次刊行物収録の著述/インタビュー/対談・鼎談	48件	255件
映像		3件
電子媒体資料		9件

*信州大学大学院農学研究科 **信州大学農学部

表-2 萬来舎、RD東京支社についての記述のある文献

文献名	萬来舎	R D社
<逐次刊行物>		
和田定夫 (1950) : イサム・ノグチのこと : アトリエ(286) : 46-51	●	
猪熊弦一郎 (1950) : イサム・野口の作品 : 教育美術11(12) : 8-10	●	
剣持 勇 (1950) : 工芸指導におけるイサム・ノグチ : 工芸ニュース18(10) : 19-23	●	
谷口吉郎 (1950) : イサム氏のデザイン : 工芸ニュース18(10) : 25-26	●	
アントニン・レーモンド (1950) : リーダーズ・ダイジェスト東京支社 : 国際建築17(1) : 26-31	●	
野生司義章 (1950) : イサム・ノグチ 人と作品 : 国際建築17(5) : 38	●	
谷口吉郎 (1950) : イサム・ノグチと握手して「新「萬来舎」」の設計要旨 : 国際建築17(5), 39	●	
三田新聞編集部 (1950) : 「日本の庭のようだ」イサム・ノグチ氏来塾感想を語る : 三田新聞639 : 1	●	
三田新聞編集部 (1950) : 研究室の建設近し 谷口工大教授、イサム・ノグチ氏が協同で設計中 : 三田新聞644 : 1	●	
相内武千雄 (1950) : 「無」—イサム・ノグチ作 : 三田新聞646 : 3	●	
谷口吉郎 (1950) : 慶應義塾大学 新「萬来舎」、彫刻と建築 : 新建築25(10) : 306-309	●	
アントニン・レーモンド (1950) : リーダーズ・ダイジェスト東京支社 : 新建築25(7) : 210-213	●	
谷口吉郎 (1950) : イサム・ノグチ展の展示 : 美術手帖35 : 20-22	●	
毎日新聞編集部 (1950. 08. 17) : 日本個展美の眞髓に徹す 新たなる美の展開 イサム・ノグチ作品展ひらく : 每日新聞 : 4	●	
竹山謙三郎 (1951) : 揺つてみたい連物 : 建築雑誌66(780) : 03-05	●	
伊藤喜二郎 (1951) : 美しき特異児童とその意義 : 建築雑誌66(780) : 06-07	●	
森田茂介 (1951) : 一つの批評試案 : 建築雑誌66(780) : 08-09	●	
池辺陽 (1951) : 肯定? 否定? : 建築雑誌66(780) : 10-11	●	
幸田彰 (1951) : リーダーズダイジェスト東京支社見学の記 : 建築雑誌66(780) : 15-16	●	
アントニン・レーモンド (1951) : リーダーズダイジェスト東京支社 : 建築雑誌66(780) : 17-24	●	
池田末造 (1951) : リーダーズ・ダイジェスト東京支社建築工事に就いて : 建築雑誌66(780) : 25-30	●	
柳宗理 (1951) : デザインにおける造型性のファクターについて (野口勇の展覧会より) : 建築雑誌66(781) : 6-7	●	
アントニン・レーモンド (1951) : リーダーズ・ダイジェスト東京支社 : 国際建築18(9) : 30-49	●	
三田新聞編集部 (1951) : 残るは研究室、大ホール 復興五カ年の歩みを見る : 三田新聞652 : 1	●	
三田新聞編集部 (1951) : 着々進む萬来舎工事 第一研究室は既に利用始む : 三田新聞661 : 1	●	
三田新聞編集部 (1951) : 普通部と萬来舎が完成 : 三田新聞667 : 1	●	
三田評論編集部 (1951) : 口絵 新築完成した大学第二研究室(三田山上)、各部の現況について、塾報〇第二研究室の新築 : 三田評論 550 : 口絵, 10, 52	●	
中村精 (1951) : 口絵(新築成了の大学研究室)、「第二研究室を見る—イサム・ノグチの設計をめぐりて」 : 三田評論551 : 口絵, 26-31	●	
レーモンド建築設計事務所 (1951) : リーダーズ・ダイジェスト東京支社 : 新建築26(9) : 表紙、261-271	●	
F (1951. 07. 05) : 古い日本を生きかず感覚、イサム・ノグチ第二回滞在作品 : 每日新聞:9	●	
池田潔 (1951. 11. 18) : 茶の間 哲学的彫刻 : 每日新聞(夕) : 4	●	
谷口吉郎 (1951. 11. 30) : 学芸「無」の魂 : 每日新聞 : 2	●	
アントニン・レーモンド (1952) : SHOCKPROOF OFFICE BUILDING : Architectural Forum: 99-107	●	
日本建築学会 (1952) 昭和26年度建築学会賞:建築雑誌67(787) : 32-51	●	
谷口吉郎、イサム・ノグチ (1952) : 慶應義塾第二研究室「慶應義塾・第二研究室」、「仕事について」 : 新建築27(2) : 2-10	●	
アントニン・レーモンド (1961) : アントニン・レーモンド作品集「わが回想」 : 建築14 : 15-19	●	
アントニン・レーモンド (1961) : アントニン・レーモンド作品集「リーダーズ・ダイジェスト東京支社」 : 建築14 : 84-87	●	
中村精 (1964) : イサム・ノグチの芸術—三田山上の部屋と庭園 : 三田評論632 : 口絵、70-72	●	
八代修次 (1983) : 慶應義塾とイサム・ノグチ : 哲学(75) : 97-121	●	
Bert Winther (1993) : ISAMU NOGUCHI: THE MODERNIZATION OF JAPANESE GARDEN : 日本庭園学会誌1(1) : 30-41	●	●
新建築社編 (1999) : Reader's Digest Tokyo Office/1951 リーダーズ・ダイジェスト東京支社 : JA(The Japan Architect)33Spring, 1999 季刊	●	
アントニン・レーモンド : 116-119	●	

萬来舎	R D社
アントニン・レーモンド (1970) : 自伝アントニン・レーモンド : 鹿島研究所出版会	●
栗田勇 (1971) : 現代日本建築家全集1 アントニン・レーモンド : 三一書房	●
新建築社 : (1981) : 谷口吉郎作品集 : 淡交社	●
ドレ・アシュトン (1997) : 評伝イサム・ノグチ : 白水社	●
三沢浩 (1998) : アントニン・レーモンドの建築 : 鹿島出版会	●
アナ・マリア・トーレス (2000) : イサム・ノグチ 空間の研究 : マルキ出版	●
日本建築家協会他 (2001) : 素顔の大建築家たち1 弟子の見た巨匠の世界 : 建築資料研究社	●
四国新聞社編 (2002) : 素顔のイサム・ノグチ : 日米54人の証言 : 四国新聞社	●
慶應義塾大学アート・センター編 (2005) : 慶應義塾大学アート・センター/ブックレット13 記憶としての建築空間—イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾 : 慶應義塾大学アート・センター	●
<単行図書>	
慶應義塾大学アート・センター/ノグチ・アーカイブ http://www.art-c.keio.ac.jp/Noguchi/index-j.html	●
慶應義塾大学アート・センター 新萬来舎バノラムムービー http://www.art-c.keio.ac.jp/radio-tanpa/movie.htm	●
柳井康弘: 谷口吉郎とイサム・ノグチ 慶應義塾の近代建築とモダン・アートⅡ「三田キャンパス戦後復興計画と新萬来舎の構想」 http://www.art-c.keio.ac.jp/radio-tanpa/2/H0412.pdf	●
柳井康弘: 谷口吉郎とイサム・ノグチ 慶應義塾の近代建築とモダン・アートⅢ「新萬来舎室内と庭園の空間デザインを体験する」 http://www.art-c.keio.ac.jp/radio-tanpa/3/H0502.pdf	●
慶應義塾大学 http://www.keio.ac.jp/	●

表-3 イサム・ノグチによる萬来舎、RD東京支社の記述のある文献

文献名	萬来舎	R D社
<逐次刊行物>		
イサム・ノグチ (1950) : 開拓な日本旅行 : 文芸春秋28(12) : 184-187	●	
イサム・ノグチ (1950) : モダンライフと室内の傾向 : 工芸ニュース18(10) : 8	●	
イサム・ノグチ、谷口吉郎 (1950) : 慶應義塾大学・新「萬来舎」設計案:国際建築17(5) : 30-37	●	
イサム・ノグチ・撮影 (1951) : 造形ニッポン:芸術潮流2(10) : 107-122	●	●
イサム・ノグチ (1951) : 私の見た日本:芸術潮流2(10) : 100-106	●	●
谷口吉郎、イサム・ノグチ (1952) : 慶應義塾第二研究室「慶應義塾・第二研究室」「仕事について」 : 新建築27(2) : 2-10	●	
イサム・ノグチ、丹下健三、久恒秀治 (1956) : 庭の造型(講談) : 芸術潮流7(6) : 165-184	●	●
イサム・ノグチ談、ノグチ・ミチオ・撮影 (1960) : 世界に庭をつくる:芸術潮流11(7) : 72-80	●	
<単行図書>		
イサム・ノグチ、長谷川三郎、滝口修造 (1953) : ノグチ: NOGUCHI : 美術出版社	●	●
イサム・ノグチ (1969) : イサム・ノグチ ある彫刻家の世界:美術出版社	●	●

件の計81件(重複有り), RD東京支社庭園についてはノグチによる記述が6件, それ以外は40件の計46件あり, 両庭園が記述された主要文献を表-2及び表-3にまとめた。

萬来舎の呼称・表記は慶應義塾内でも統一されておらず, 各人, 年代によって異なる。2000年に「第二研究室」が「萬来舎」と改名され, それ以前から談話室は通称「ノグチ・ルーム」と言い習わされていた⁷⁾。当論文ではこれに従い建物を「萬来舎」, 談話室を「ノグチ・ルーム」に統一して使用する。ただし引用については掲載時の呼称を用いる。

なお, 萬来舎は2003年に取り壊され, ノグチ・ルームは移築されたもののオリジナルを想起させることは困難な状態となっている。また, RD東京支社庭園も1963年に取り壊されている。

3. 萬来舎庭園の制作過程

萬来舎庭園は, 室内・家具, 彫刻と庭園を一連のものとして,

ノグチが実施を前提に初めて設計した庭園である。

(1) 萬来舎の設計依頼

イサム・ノグチは1950年5月2日に「レジャーの研究」のため各国を歴訪した後、来日する。敗戦後間もない日本で彼は成功したアメリカの第一線のモダンアーティストとして、多くの日本人芸術家に熱狂的に迎えられられる。

来日して数日の内に彼は慶應義塾大学三田キャンパスを訪れる。空襲の被害を甚大にこうむっていた三田キャンパスでは復興事業を着々と進めていた。イサム・ノグチは当時の塾長潮田江次により、慶應義塾全体の建築計画を行っていた建築家谷口吉郎（当時東京工業大学教授、1904-79）に引き合わされる。谷口吉郎は三田キャンパスを一貫したデザインの元に計画しており、第四号館、第五号館、学生ホールが1949年に竣工していた。ノグチが訪れる直前の1951年5月2日には「第二研究室」の実施設計が完成していたという⁸⁾。この第二研究室の計画地には1945年空襲で消失するまで福澤諭吉が千客万来の意をこめて「萬来舎」と呼んだ教職員や塾生の団欒のための建物があり、谷口吉郎は第二研究室を「新萬来舎」と意図して計画した。

三田キャンパスを訪問してノグチは「アメリカの大学と比べてスケールが小さいが、親しい気持が随分表われている。日本の庭がこれと丁度同じだと思います、大ホールは人間がこしらえたものを自然が破壊したというかんじだ。」⁹⁾と感想を述べている。谷口吉郎は「三田の丘へ私はイサム・ノグチ氏とのぼった。品川湾の海を見おろす丘の上には、慶應義塾大学の校舎が建っている。夏の空は晴れ、白い雲の峰が美しい。イサム氏は『アクロポリスだ』と叫んだ。」¹⁰⁾と訪問の様子を記している。

谷口吉郎はイサム・ノグチに彼の父であり、慶應義塾大学文学部教授でもあった野口米二郎の記念となるようなものを何かつくるか、と示唆した。イサム・ノグチはこれを次のように受け止め、制作に携わる。「これは英雄を讃えるような風の記念建造物でもなく、又一個人の追憶に中心を置いたものでもありません。それは、すべての人々の為につくられた『萬来舎』と名づけられるものであります。教師達の為には庭園であり休憩室であり、又そこへ来て空気を吸い、寛いで詩を読み、或は瞑想の中で生命力を再び満たそうとする学生達の為のものなのです。目的がいつも人間の魂を招き、そこで高揚させる事にあった、かの京都の美しい詩仙堂や、中国その他の地にあってお手本となったもの等に、私は敢えてこれを比したいと思います。それは1つの舞台です。一静かに劇的な…。」¹¹⁾ここからは詩仙堂の建築・庭園を念頭に、当時の研究テーマであった「レジャー」となりうる空間を萬来舎に組み込もうという意図や、舞台装置制作の経験も読みとれる。また野口米次郎の記念としながらも「モニュメント」ではなくあくまで使用されることに意義を認めていることに注目したい。

(2) イサム・ノグチ作品展と建築家谷口吉郎との協同制作

イサム・ノグチは日本で展覧会開催の依頼を受けており、会期は1950年8月18日から27日（結果的には30日まで延期）、毎日新聞社主催、場所は日本橋三越百貨店であった。たった5週間という準備期間で、彼は通産省工芸指導所において萬来舎に使用される家具や彫刻《無》（石膏）等主要なものを制作し、萬来舎模型もこの展覧会に出品した。谷口吉郎との協同制作は慶應義塾大学の「四号館の二百七番教室に数日立てこもって」行われた¹²⁾。谷口吉郎はこのときの様子を次のように記す。「二人の仕事は分離したものでなく、互いに協力し、スケッチにおいて、製図において、模型において、暑い夏の日も、夜も、いろいろと熟議し合った。」¹³⁾「私が設計した建物の中に置かれる家具を、氏が考案する時にも、氏の設計力は甚だ独特だった。用材や工法は日本の従来のものであっても、それが氏の設計力にかかると、すばらしいモダーンなものになってしまう。それは氏の意匠力の魔術であった。

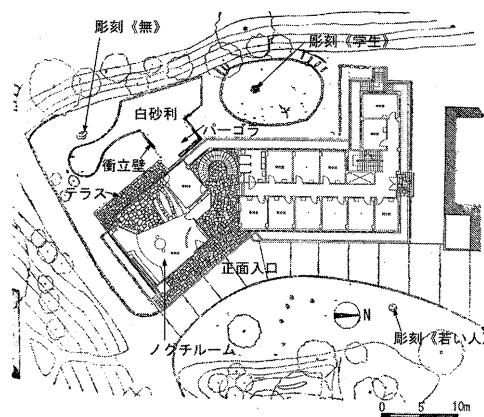


図-1 萬来舎配置図（田井・加筆）

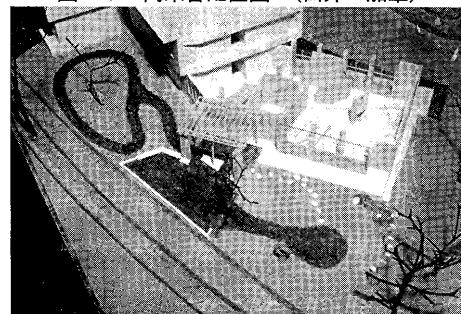


図-2 萬来舎の模型。西側庭園。¹⁴⁾

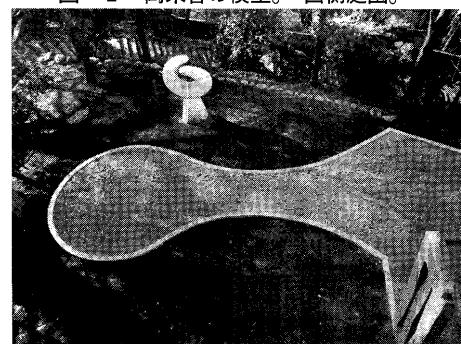


図-3 萬来舎庭園の鳥瞰¹⁵⁾

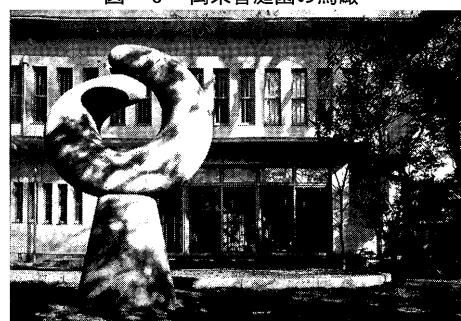


図-4 《無》から萬来舎を見る¹⁶⁾

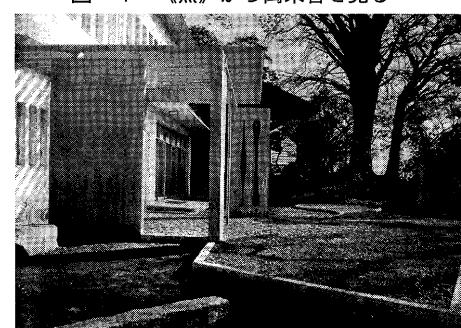


図-5 北から見るバーゴラと衝立壁¹⁷⁾

」¹⁸⁾ しかしながら、「なお私は彫刻家と共同制作をしながら、建築が本性を失って、彫刻にひきずられてならないことを、自ら注意した。同時に私はこの建物を『連作』の一部として設計しているのであるから、彫刻との協和が度を過して、そのために今までの連作的意匠が破れるのを警戒した。」¹⁹⁾ と、イサム・ノグチの旺盛な造形力と折り合いをつけることへの苦心をうかがわせる。制作に参加していた由良滋は現場でのノグチの制作風景を「仕上げ前のコンクリートだけのノグチ・ルーム。その中で彼は簡単な模型を自らつくり、そこに《無》のマケットを置き、室内から外部に向かって、どのような位置にするか前後左右に動かし、片目でマケットを確認していた。」²⁰⁾ と記し、ノグチが室内からの彫刻《無》の見え方を十分に配慮していたことがわかる。

1950年9月にノグチは帰米するが、後に述べるリーダーズ・ダイジェスト社の仕事を得て1951年3月に再度来日、RD東京支社庭園を完成させてから萬来舎の現場に戻る。ノグチが帰国していた間に彫刻《無》の模型は彫刻家庄井力と石材店石勝の職人の手で白川石へ写し取られた。^{21) 22)}

(3) 萬来舎庭園のデザイン

萬来舎は地上2階地下1階建てで慶應義塾大学三田キャンパスにおける戦後初めての鉄筋コンクリート造であり、その建築面積は約490m²、建物西側にあたる庭園面積は約460m²であった。建築施工は株安藤組（現・安藤建設）、建築総工費は2,500万円²³⁾で1951年8月末に竣工した。当時の庭の全体像は「玄関からいったん外に出て、私は、この建物と大ホールの間を抜けて裏庭に出てみた。まだ庭は完成していなかったが、これは甚だ新鮮な眺めであった。テラスの軒を支える厚いコンクリートの壁には、縦に大きく透かしが入っており、ゆるやかな橢円形にくぎられた地面には玉砂利が敷きつめてあって、縦と横の空間に美しい模様を描いたように見えた。そして庭の先の涯端に近いところに、例の『無』の彫刻が、どっしりと据えられていた。」²⁴⁾ と1951年12月発行の三田評論で描写されており、同時に庭は未完であったことも記されている。この点についてはノグチも1953年の段階で「尚実現の望みを持っては居ますが、私が試みた二つの企ては未だ未完成のまま残って居ます。」²⁵⁾ と萬来舎庭園とRD東京支社庭園が共に未完であることを記している。この後ノグチが手を加えたことを示す資料も見つからない。模型写真（図-2）には認められる西北の回遊路や、テラスからの飛び石等は工事されておらず、これらが未完部分だと推測される。植栽については周囲の既存林を利用しておらず、新たな植栽デザインに対する記述は確認できなかった。

さて、未完であることを鑑みながら上記とその他の記述から萬来舎庭園デザインの特徴を4項目にまとめると、①高さ210cmの彫刻《無》が西日の差し込む西端の崖の上に設置され、室内からの眺めの焦点となるとともに、三田山上から見下ろす景色を萬来舎へと取り込む装置となっている。これはノグチが「西の方に石の彫刻『無』の穴をとおして、パノラマ的な風景が展開する。」²⁶⁾、「視界は西に向けてひらけ、沈んで行く太陽が、私の彫刻『無』をシルエットにして浮き出させ、天上からの光りで点火してそれを石燈籠のようにします。」²⁷⁾ と記していることからも明らかであり、彫刻という物体で周囲の環境を結びつける仕掛けを設けていたといえる。また猪熊弦一郎は「あれは日本の燈籠を作りたい」という気持で、石にしたかったらしかったが石膏でやった。」²⁸⁾ と石燈籠としての思いをこめて《無》が作成されたことを確証づけている。しかしノグチの思いをよそに人々は以下のように感じた。「とくに人々を驚かせたのは、庭園の中心に、千五百貫もあるという大きな石の彫刻がすえられていることである。（中略）これが出来たときには、人々は目をみはり、或いは揶揄し、大きな話題となつた」²⁹⁾。この記述は抽象彫刻が要として設置された新

たな庭の出現を、逆に裏付けるものと考えることができる。

②室内外の連続。談話室の鉄平石貼りの床面がレベル差なく屋外テラスまで連続し、開放的なガラス戸壁面で内外をつなげている。「フロアは板張りであるが、裏庭に面した部分は、石板石が敷かれて、そのままテラスにつづいている。」³⁰⁾ 「地面と床の高さの差ができるだけ少なくし、開口部を床までとて、空間の連続性を重視した。」³¹⁾ 地模様の円弧は平面図で確認できるように室内平面デザインの円弧と呼応している。

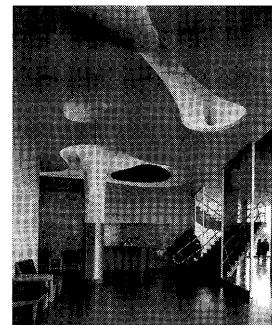


図-6 American Stove Companyのためにノグチがデザインした天井（1947）³⁰⁾

③抽象的で有機的な曲線を用いた地模様。地模様は大谷石の縁石で区切られ中には白砂利が敷かれた。ノグチは写真（図-6）のように1940年代から有機的曲線を彫刻や家具・室内デザインに用いてきたが、これを日本庭園の地模様として地面に描いたものと解釈できる。模型の段階では「心字池を思わせる」³²⁾ という記述が、また完成後は「地面には従来の日本庭園にみることの出来なかつた新しい模様がつくられている。」³³⁾ との記述が残されている。

④立面デザインとしてのパーゴラ衝立壁。前述の引用文（24）で描写されたように地模様のデザインと呼応した抽象的な模様がコンクリート壁にくり抜かれている。空間を区切りながらもつなげる日本庭園の袖垣の手法を想起させる。

この他、庭園内の北部に鉄を溶接した彫刻《学生》が設置されたが、細い鉄棒のシルエットを背後の木の枝が邪魔をし、自他共に設置場所に難があったことを認めている。^{35), 36)}

以上述べてきたように、萬来舎庭園では伝統的日本庭園の直接的形体をそのまま用いるのではなく、日本庭園の手法をノグチのそれまでの手法に引き寄せて、日本庭園のありかたを表現しようとしていたと考えることができる。先に引用した谷口吉郎の指摘にもある通り、イサム・ノグチは日本従来の用材や工法を用いてもモダンなものに変容せしめてしまう。萬来舎庭園のデザインはその結果でもあると思われる。

4. リーダーズ・ダイジェスト東京支社庭園

RD東京支社庭園はノグチの初めて竣工された庭園作品である。

(1) 建築家アントニン・レーモンドとRD東京支社の計画

アントニン・レーモンド（1888-1976）はその生涯の合計43年間を日本で過ごしたアメリカ人建築家であり、日本近代建築の先駆者であった。1949年、彼はRD本社から東京支社の設計を依頼される。RD社は「戦後の東京に最初の、恒久的な建物の建設着手が正当であると考え、その上に、現代建築としてアメリカが捧げ得る最善の建物とすべきである」³⁷⁾ と考えていた。レーモンドは皇居に面した約4,000坪の恵まれた敷地で「建物を庭の中において、（中略）将来の都市計画の模範となるように、ハンサムな橋や、皇居への通用門などと張り合うのをさけようとした。」³⁸⁾ と庭との関連を含めて景観へ配慮して計画をした。また「日本建築の中に同じく見いだされるその諸原則、（中略）自然への近接ということ、すなわち自然をどこからも眺めることができ、いわば家の中にまで自然を招じ入れること」³⁹⁾ を鉄筋コンクリート建築で具現化させる設計をし、1950年5月1日に着工した。

(2) イサム・ノグチへの設計依頼と制作過程

イサム・ノグチは、1951年ニューヨークにてレーモンドからRD東京支社庭園の設計を打診された。RD本社からは「駐車場の代りに庭園をつくることにしたために浮いたセメント代」⁴⁰⁾ を

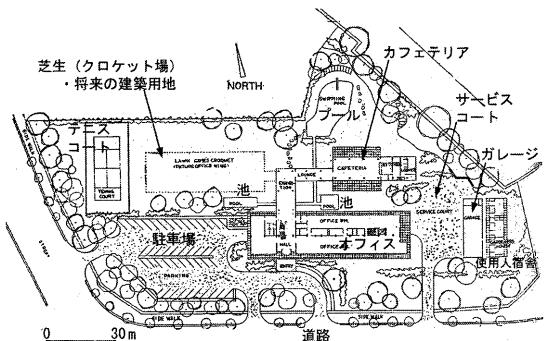


図-7 アントニン・レーモンドによるRD東京支社配置図(田井・加筆)

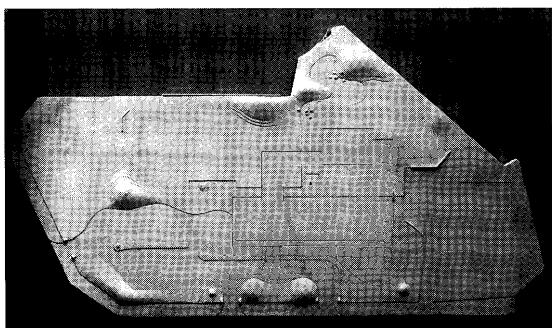
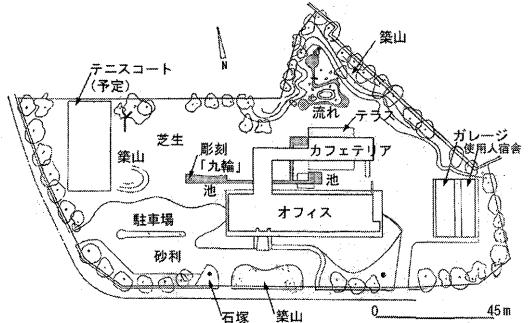
図-8 イサム・ノグチによるRD東京支社模型⁴¹⁾

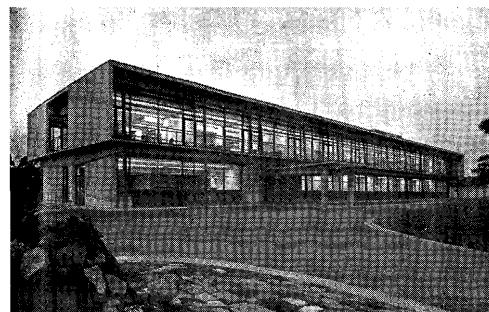
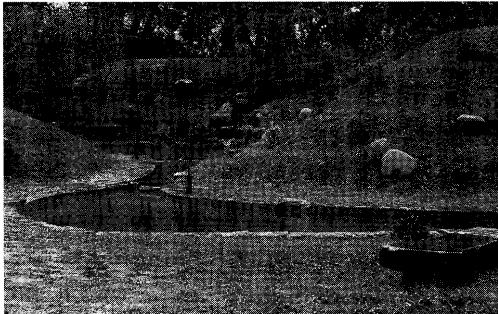
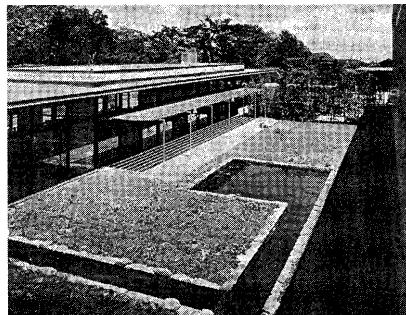
図-9 イサム・ノグチによるRD東京支社配置図(田井・加筆)

設計料として提示され、日本に戻る経済的な手段を模索していたノグチはこれを受けた。レーモンドとノグチの庭園に関しての合意点はレーモンドによれば「われわれは法規の許す範囲で敷地いっぱいに建てる代わりに、一部分に建築し、周辺に十分な庭を残し、美しい都市のデザインのためにも、非利己的に土地を利用する例になろうと望んでいた。」⁴²⁾といったものだった。

1951年3月28日にノグチは来日。4月25日のRD東京支社竣工までの約3週間を彼は現場にて庭作りに費やした。その様子は「先にたって、シャベルを握り、樹を植え、石を運んで完成させてしまった」⁴³⁾と報道され、ノグチ自身も「世界一熟練した造園家、つまり日本の普通の植木屋からいろいろと学ぶ機会を得た。この敷地内にある石を使って彼らとともに泥のなかで働きながら、私は石を配置する基本原理を身につけた。」⁴⁴⁾と述べている。

(3) RD 東京支社庭園のデザイン

RD東京支社の敷地面積は13,249m²、庭園面積11,676m²、施工は竹中工務店で1951年4月に竣工した。ノグチはレーモンドの庭園マスター・プラン(図-7)と与条件をベースに、模型(図-8)に見られるように敷地を一つの空間として捉えながら、駐車場や芝生園遊地などの機能に適応するデザインを抽象的曲線の地模様を用いてまとめた。最終的な竣工図は図-9であり、これらを比較すると駐車場、芝生広場、水景はレーモンドの配置を踏襲していることがわかる。また模型と竣工図の比較では池の形状が異なっていることがわかる。ノグチは「日本の絵画の代りに、遊

図-10 RD東京支社図 南から建物正面を見る。
左下には石塹が見える⁴⁶⁾図-11 敷地北側の築山と水景⁴⁷⁾図-12 流れの東から西を見る。右端に支柱付きの樹木が確認できる。⁴⁸⁾図-13 彫刻の西側から見る夜景⁴⁹⁾図-14 中庭の池とカフェテリア⁵⁰⁾

歩場式にやって見ました。」⁴⁵⁾と述べ、固定した視点で鑑賞する庭園ではなく、歩いて周遊する実用の庭という性格を持たせた。当時の様子は「ノグチの彫刻作品も一点西側の池の中に立っていた（中略）池はその彫刻の位置から発し、玄関のギャラリーの下を抜けて、食堂棟との間の中庭をうるおわせている。そして再びラウンジの下を通り抜けて、北側の池に至って終わる。北側の一帯は（中略）外濠と内濠の間を流れる日本橋川の石垣となって落ちる。（中略）道路端にはやや道と縁を切る溝があり、石垣が高くなっている垣根をつくり、玄関に入る車寄せの手前に築山と松の木を残した。そのあたり芝生を置いて平石を敷き、一部盛塙のように巨大な盛りあげをつくり、それにも石を貼る何気ない造形であった。中に入っても、池や流れの周辺は芝生がうねり、時には盛られて、しかも視線を越えることなく広さを見せていた。」⁵¹⁾と描写されている。

RD 東京支社庭園においては以後の彼の庭園に欠かせない要素となる①水景、②土地の起伏、③自然石の配石を見出すことができる。そしてこれらは伝統的日本庭園の手法を用いてノグチのデザインを表現したものであった。水景はヒートポンプに利用するために汲み上げた地下水をさらに再利用したものであり⁵²⁾、建物の西に設置された鉄製彫刻《九輪》の足元から中庭のプールにつながる池へと流れしていく。築山は現場発生土を利用、配石に使用した自然石も現場発生石を使用した。植栽はマツなど既存樹木を活かした他、写真からは道路に面した南側や建物の西北、噴水付近などに新たな樹木植栽を確認できる。芝生、そして南側敷地入り口の石塚にはイチゴが植栽されたが、いずれもノグチの選択によるものかは不明である。未完の部分とは、ノグチが RD 東京支社庭園のために作成した彫刻《こけし》が予算不足のため設置されなかっただことだと考えられる⁵³⁾。

レーモンドは庭園について「これは日本の偉大な造園芸術に新しい血を流し込む創造的な試みなのである。」⁵⁴⁾と高い評価をしているが、一般には「予算が足りないのか、かなりお粗末だ。日本の伝統的な庭園には遙かにすぐれたものがある。」⁵⁵⁾等と辛らつな意見が多かった。

5.まとめ

イサム・ノグチは萬来舎庭園では伝統的日本庭園の直接的形体をそのまま用いるのではなく、日本庭園の手法をノグチのそれまでの手法に引き寄せて、日本庭園のありかたを表現しようとしていたと考えることができる。RD 東京支社庭園においては伝統的日本庭園の手法や技術を自らの身をもって経験しながら、ノグチのデザインに変換して表現したといえる。そしてこの 2 作品の経験は初期庭園最後の「ユネスコ本部の庭園」への布石となった。ノグチにとっての日本庭園の指南役、重森三玲との出会いを得、「ユネスコ本部の庭園」では伝統的日本庭園の手法と形体の取得がノグチ自身の造形性と融合あるいは葛藤し、その試行錯誤が臨界点にまで達する。この経験を経て、日本庭園から得たものは彼自身の造形手法となる。ノグチにとって重要な変節点となるこの「ユネスコ本部の庭園」までの過程を今後の課題として明らかにしていきたい。

引用文献

- 1) 長谷川三郎（1951）：桂離宮を抽象する：芸術新潮 2 (9), 120-123
- 2) イサム・ノグチ（1960）：世界に庭をつくる：芸術新潮 11 (7), 72-80
- 3) イサム・ノグチ（1973）：重さは軽さの意味を思いだせる：SD (10-8), 30-34
- 4) アナ・マリア・トーレス（2000）：イサム・ノグチ 空間の研究：マルモ出版
- 5) Marc Tribe (2003) : NOGUCHI IN PARIS, THE UNESCO GARDEN,

William Stout Publishers

- 6) Bert Winther(1993) : ISAMU NOGUCHI: THE MODERNIZATION OF JAPANESE GARDEN: 日本庭園学会誌 1(1), 30-41
- 7) 前田富士男（2005）：はじめに：慶應義塾大学アート・センター／ブックレット 13 記憶としての建築空間—イサム・ノグチ／谷口吉郎／慶應義塾：慶應義塾大学アート・センター, 5-8
- 8) 由良滋（2005）：慶應義塾との絆－新「萬来舎」建設から解体へ－：7) と同じ, 22-35
- 9) 三田新聞編集部（1950）：“日本の庭のようだ” イサム・ノグチ氏來塾感想を語る：三田新聞(639), 1
- 10) 谷口吉郎（1950）：彫刻と建築：新建築 25(10), 306-309
- 11) イサム・ノグチ（1950）：劇的な舞台：国際建築 17(5), 30-39
- 12) 三田新聞編集部（1950）：研究室の建設近し 谷口工大教授、イサム・ノグチ氏が協同で設計中：三田新聞(644), 1
- 13) 10) と同じ
- 14) 11) と同じ
- 15) 谷口吉郎（1952）：慶應義塾・第二研究室：新建築 27(2), 2-10
- 16) 15) と同じ
- 17) 15) と同じ
- 18) 谷口吉郎（1950）：イサム氏のデザイン：工芸ニュース 18(10), 25-26
- 19) 15) と同じ
- 20) 8) と同じ
- 21) 広井力・白坂ゆり（2001）：イサム・ノグチの 50 年代、日本—広井力 インタビュー：美術手帖, 66-73
- 22) 8) と同じ
- 23) 三田新聞編集部（1951）：着々進む万来舎工事 第一研究室は既に利用始む：三田新聞 661, 1
- 24) 中村精（1951）：第二研究室を見る—イサム・ノグチの設計をめぐりて：三田評論(551), 26-31
- 25) イサム・ノグチ（1953）：ノグチ NOGUCHI：美術出版社、頁記載無し
- 26) イサム・ノグチ（1951）：私の見た日本：芸術新潮 2(10), 100-106
- 27) イサム・ノグチ（1952）：仕事について：新建築 27(2), 2-10
- 28) 猪熊弦一郎（1950）：イサム・野口の作品：教育美術 11(12), 8-10
- 29) 中村精（1964）：イサム・ノグチの芸術—三田山上の部屋と庭園：三田評論 (632) : 口絵, 70-72
- 30) Bruce Altshuler (1994) : Isamu Noguchi :Modern Masters vol.16 : Abbeville Press, 54
- 31) 24) と同じ
- 32) 藤岡洋保（2005）：慶應義塾と建築家・谷口吉郎：7) と同じ, 10-21
- 33) 相内武千雄（1950）：“無” —イサム・ノグチ作：三田新聞(646) : 3
- 34) 29) と同じ
- 35) イサム・ノグチ（1969）：イサム・ノグチ ある彫刻家の世界：美術出版社, 170
- 36) 24) と同じ
- 37) アントニン・レーモンド（1970）：自伝アントニン・レーモンド, 197-206
- 38) 37) と同じ
- 39) アントニン・レーモンド（1951）：リーダーズ・ダイジェスト東京支社：国際建築 18(9), 30-49
- 40) 35) と同じ, 170
- 41) 4) と同じ, 64
- 42) 37) と同じ
- 43) 每日新聞 (1951.7.5), 9
- 44) 35) と同じ, 170
- 45) 25) と同じ
- 46) アントニン・レーモンド（1951）：リーダーズダイジェスト東京支社：新建築 26(9), 261-272
- 47) 4) と同じ, 65
- 48) 栗田勇（1971）：現代日本建築家全集 1 アントニン・レーモンド：三一書房, 184
- 49) アントニン・レーモンド（1952）：SHOCKPROOF OFFICE BUILDING : Architectural Forum : 99-107
- 50) 39) と同じ
- 51) 三沢浩（1998）：アントニン・レーモンドの建築：鹿島出版会
- 52) アントニン・レーモンド（1951）：リーダーズダイジェスト東京支社：建築雑誌 66(780) : 17-24
- 53) 35) と同じ, 170
- 54) 39) と同じ
- 55) 森田茂介（1951）：一つの批評試案, 52) と同じ, 08-09